

研究論文

# 初等国語科授業を通じた教師の解釈実践

－〈大学附属の新しい役割〉との葛藤に着目して－

山 田 直 之

## 1. 問題設定

本稿の目的は、国立の大学附属小学校教師を対象におこなったインタビューの結果に基づき、「地域の小学校の模範となる教育実践を提案しなければならない」といった、大学附属学校の古くて新しい役割<sup>1</sup>と教師の実践の関係を、当事者がいかに語るのかを描き出すことである。それにより、中央からトップダウンで降ろされた教育政策を現場がただ単に実行する、といった、単線的な教師像を乗り越える視点の提供を試みる。

今日、教員養成大学に附属する学校のあり方が様々に問われている。この状況は、学校という公的機関の役割の希薄化と無関係ではない。高度経済成長を支える人材の育成を使命のひとつとした学校教育の量的拡大は、たしかに、「機会均等の理念をしつつ著しい普及発展を遂げ、科学技術の進歩や経済の高度成長の原動力となっており、今日の我が国社会の発展に大きく寄与」<sup>2</sup>してきた。しかし、高度経済成長の終わりとともに、それまで「国民の教育要求と、教育に対する社会的要請とが互いに他を補う形でかみあった」（陣内 2005: 126）学校と就職関係の「蜜月の時代」が終わりを迎えると、求められる学校教育のあり方は変化し、それに伴って、大学附属学校に対する社会的要請も変化してきた。例えば、2003年に制定された国立大学法人法に基づく国立大学の法人化は、「教員養成に関わって、教育実習を行うこと」（高木 2011: 35）や、「その時代の教育課題に対応する先進的教育実践を提唱していくこと」（大泉 2011: 25）を主たる役割としてきた大学附属学校のあり方を根幹から揺るがした。

このような背景のもとで、附属学校のあるべき姿が模索され、近年では〈大学附属の新しい役割〉の一例として、大学をはじめとする諸機関との「共同性」（高木 2011: 36）を重視する立場や、地域の学校との「学び合い」の拠点（大泉 2011: 25）を重視する立場が打ち出されている。大学附属学校教師を取り巻く現在の状況は、伝統的な「教育実習の場」や「その時代の教育課題に対応する先進的教育実践を提唱する場」に加え、「諸機関の共同的な連携の場」になることが求められている。そして、これらを含んだ「地域の学校の模範」となるような、〈大学附属の新しい役割〉を模索する場になっていると言えよう。

<sup>1</sup> 早くは学制発布翌年の明治6年に、東京高等師範学校に附属する小学校（現筑波大学附属小学校）が「師範学校の授業の練習学校及び地域の小学校の模範学校」として設置されている。なお、国立の附属学校の歴史については（[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/005/toushin/1901/011124.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/005/toushin/1901/011124.htm)）を参照。最終閲覧日：2020/01/17。

<sup>2</sup> 文部科学省ホームページ「経済・社会の発展と教育改革」（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/hakusho/html/others/detail/1318290.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1318290.htm)）最終閲覧日：2019/10/17。

ここで注目したいのが、伊勢本（2017: 349）がグッドソン（Goodson, I. F. 2001）を引きつつ述べているように、教師という存在は必ずしも、限られた状況の中で想定されうる教師モデルに従って行動する他律的な存在ではないということである。附属学校の教師が、学校の内外から求められる種々の〈大学附属の新しい役割〉を内面化しつつも、日々の教育実践において目の前の子どもに対する責任を果たすことに注力するならば、彼／彼女ら自身が〈大学附属の新しい役割〉についていかに語るのかは注目に値するテーマである。なぜならこの問いは、先行研究において探求されてきた〈大学附属の新しい役割〉を、教師のエージェンシー（すなわち、行為の担い手としての意思と能力）に基づいた、内在的な課題として再発見することを意味するからである。

以上の背景及び問題意識より、本稿では、大学附属小学校教師による国語科教育実践を道具立てとしたインタビューを手がかりに、教師が〈大学附属の新しい役割〉と自身の教育実践との関係をいかに語るのかを明らかにする。

議論は次の手順で進める。まず、本稿の対象とする調査の概要及び対象となる調査基準を示す（第2節）。次に、インタビューの道具立てとなった教育実践の概要を示した上で、調査協力者の語りを分析し（第3節、4節）、最後に、総合考察をおこなう（第5節）。

大学附属小学校に対する社会的な要請と、教職経験及び学問的知見の積み重ねの中で築きあげられた教職に対する使命観との間に生じる葛藤に対し、附属教師はいかにして折り合いをつけようとしているのか。本稿は、個人の語りという主観的な窓を経由しつつも、幾分かの普遍性をめざしてこの問いに答える試みでもある。<sup>3</sup>

## 2. 調査の概要と協力者の選定方法

筆者は、2019年4月から、持続可能な学校改革の鍵を握る教師の役割に注目し、学校現場において現実の問題状況を乗り越えようとする教師たち自身の組織学習に介入している。この介入研究は、変化を創造する主導的な担い手としての教師の新たなあり方を発見し概念化した上で、今日求められている、協働して変革を起こすことのできる教師の専門性の開発について明らかにしようとするプロジェクトである。このプロジェクトを進めていく中で、本稿の調査協力者であるサクラ先生（仮名）と出会った。

サクラ先生は、大学附属小学校において、自らが担任する学級を受けもちながら、研究部に所属する30代の女性教師である。教師歴は18年<sup>4</sup>で、大学附属小学校に赴任したのは5年前である。この5年という附属教員歴は、当該大学附属小学校においては、副校長や教務主任・研究部部长、そして

<sup>3</sup> 教師個人の語りに注目することで、単に教育言説の脱構築にとどまらない研究の重要性は、とりわけ教育社会学において示されてきた（白松 2004、伊勢本 2017 など）。伊勢本（2017: 351）によれば、その意義は次の2点に収斂される。すなわち、第一に「問題状態における当事者の脱『問題』化プロセスやその在り方を探る教育臨床への方法的可能性を、教師の研究として探求」できるようになる点。そして第二に、「言説に対する現実の教師の姿を一つ一つ描き出し、既成の教師像を解体することが教師という職業に対する理解を深めること」につながる点である。なお、この二つの意義は、それぞれ白松（2004: 191）及び山田（2010: 72）の主張を踏襲する形で伊勢本が提示したものである。

<sup>4</sup> 講師期間及び大学院修士課程在学中を含む。

6年目の教師1名に続く4番目の長さである。したがって、附属教員として豊かな経験値を有する教員といえよう。

サクラ先生と知り合ってから、今日まで7ヶ月の間に、6回の研究ミーティングをはじめ、合宿などを含めて約40時間、教育についての討議を重ねてきた。インタビューにおけるやりとりは、全てボイスレコーダーで録音し、トランスクリプトの作成をおこなっている。以下の分析においては、サクラ先生による授業実践の学習指導案に加え、このトランスクリプトデータを資料として使用する。

分析の前に、本稿の調査協力者としてサクラ先生を選定した理由を、授業科目とサクラ先生の学校内での位置、加えてデータの特徴と併せて述べておく。第一に、サクラ先生は「これまで文学や詩についてメインで取り組んできた(2019/08)」国語科を自身の専門と自認する教師である。国語科は、国語という考え方自体が内包する特質ゆえに、教師のエージェンシーが問われやすい教科である。イ・ヨンスク(2012: ix)が指摘するように、『国語』はできあいのものとして存在していたのではなく、『日本が近代国家としてみずからを仕立てあげていく過程と平行して、『国語』という理念と制度がしだいに作りあげられていった』ものである。それゆえ国語科は、国民の形成という学校教育が不可避的に有する課題と、目の前の子どもの固有性を尊重しつつ、彼／彼女を援助するという課題の二重性が現れやすい教科であると言える。教師のエージェンシーを問う本稿において、そうした特性を意識する教師の語りを分析することは、『大学附属の新しい役割』への教師自身の認識を問う上でも目的に合致すると考えられる。

第二に、このような国語科の特性と向き合う中で、サクラ先生は、『大学附属の新しい役割』を、他の教師よりも現実味のあるものとして受け止めていることが予測される。それは、彼女が研究部の主要な構成員の一人だからである。当該附属小学校が、前年(平成30年)度の自己点検書において、自身の学校の役割を次の4つに設定していることから、研究部が学校の中心となって附属学校の役割の遂行に従事しなければならない立場にあることがわかる。その役割とはすなわち、(1)大学と一体になって、教育の理論と実践に関する研究を行う。(2)大学の教育実習機関として、実習生を随時受け入れ、適切な指導を行う。(3)教育に関する理論を研究し、教育実践に役立てる。(4)現職教員に研修の場を提供する、である。

これらのことを勘案した時、『大学附属の新しい役割』に対する彼女の語りは、附属学校現場における現状の一端を担保し得るものだと言えるだろう<sup>5</sup>。実際にサクラ先生は、自身の授業実践の動機を探る中で『大学附属の新しい役割』を再発見し、実践の中に織り込まれている多層的意義付けを、矛盾との葛藤の中でおこなっていた。インタビューでは、サクラ先生の実践の動機を探る際の道具立てとして、サクラ先生による学習指導案を使用した。次節では、サクラ先生が自身の実践と『大学附属の新しい役割』との関係を最も明示していたと考えられるインタビューの際に用いた学習指導案と

<sup>5</sup> リアリティを担保する視角として、もう一点見過ごしてはならないのが、調査協力者自身が語る言葉から看取される「矛盾」である。伊勢本(2017: 353)は、「あえて(研究協力者を)1名に限定している理由」として、この「矛盾」に注目する重要性を説いている。本稿ではこの伊勢本の述べる「社会構成主義の認識に依拠するインタビュー」(同上)という手法に共鳴し、サクラ先生の「葛藤」に着目することで、「新しいストーリー形成の契機」を探っていく。

ともに、その教育実践の概要を示す。そして、実際に彼女の語りを示していく。

### 3. 授業実践の省察を通じた〈大学附属の新しい役割〉の批判的解釈

2019年10月19日におこなったサクラ先生へのインタビューでは、直前の10月17日に行われた研究授業が話題にあがった。当該授業はサクラ先生が担任を受け持つ第4学年でおこなわれた国語科の授業で、今西祐行の「一つの花」<sup>6</sup>を取り扱った授業である。

授業は本稿の末尾に掲載した学習指導案（資料1）に基づき、「（作品中の登場人物である）お父さんが渡した一輪のコスモスを通して、そこに込められたお父さんの思いや願いについて考えることができる」ことを目的として展開した。また、その考えの理由や根拠を、本文のみならず「生活経験を根拠」にして子どもたちに発見させようと試みた授業である。

2018年8月に提出された、「国立教員養成大学・学部、大学院、附属学校の改革に関する識者会書」では、「（7）国立大学附属学校についての課題」として、「① 在り方や役割の見直し」<sup>7</sup>が下記の通り挙げられている。

国立大学附属学校は、地域のモデル校としての役割が期待される一方、一般に入学者選考を行い、地域の公立学校とは児童・生徒の構成が異なっているために地域のモデル校にはなり得ないとの意見もあり、入学者選考の実施方法を含む国立大学附属学校の在り方や役割を改めて見直すことが必要である。（下線部ママ）

これに倣えば、日本で一般的に語られる大学附属学校、そしてそこで働く教師についての物語は、現状は特別な児童生徒を対象としているがゆえに一般化できない教育実践も多いが、改善を施すことによって「地域のモデル校としての役割」を全うすることが望ましい、という期待によって構成されるものだと考えられる。

しかしながら、まずサクラ先生とのインタビューによって示されるのは、そうした物語によって作られた大学附属学校の教師像を直接重ね合わせることはできない、彼女自身の職能開発経験に基づく教育実践への眼差しである。具体的には、〈大学附属の新しい役割〉を遂行する前に、まず一人の教師として子どもと対峙することを心がけざるを得ないという語りであり、〈大学附属の新しい役割〉を意識するとしても、それは地域諸学校の教師に向けた模範的振る舞いではない、という語りである（以下、インタビューである筆者をYとする。また、下線部及び補足、個人情報保護のための修正は引用者による）。

Y: 僕公立の小学校（の教員）も経験したことないんで、割と（一般的な公立学校と大学附属学校と

6 「光村図書／東京書籍／教育出版・4年上」に掲載。

7 文部科学省ホームページ（[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/077/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2017/08/30/1394996\\_001\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/077/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/08/30/1394996_001_1.pdf)）最終閲覧日：2019/10/22。

は) どう違うのかなとか気になるんですよ。そもそも僕らの研究の中ではやっぱり研究部ってのかなり意識されますし、副校長先生とか研究部長の先生の話は附属学校としてどうしていくかっていうことにどうしても集中するじゃないですか。それで正直普段、附属教員ってこと意識することがどれくらいあるのかなとか、保護者の方からそういう目で見られたりするって感じることはありません？

サクラ先生: 感じることはありませんけどそれを背負ってる。(中略)でも結局やってることは授業やから。その附属やからこんなことができるのかってというのは思ってたなくて、今のいる目の前の子どもらと楽しく授業するにはどうしたらいいかな。子どもらが考えて、考えるって楽しいなって思うような授業するためにどうしたらいいかなってことを考えるだけ。 (2019/10/19)

こうした語りには、仮に大学附属学校の役割を引き受け、「地域のモデル」になるような授業実践を構想するとしても、教師という存在は目の前の子どもが背負う事実に基づいた教育実践を構想せざるを得ないという、サクラ先生の含意があると考えられる。というのも、ここで語られる「目の前の子どもらと楽しく授業する」ための条件である「個に応じた指導」という考えは、サクラ先生自身の教育観のみならず、保護者の教育観にまで浸透しているという認識が、彼女の語りに現れているからである。

サクラ先生: それ(授業の見せ方)が(研究部の構成員に)あかんとか言われたんですね。見せ方が全然あかん。

Y: 見せ方が駄目だって言われたんですか。

サクラ先生: うん。

Y: それもうちょっと教えてもらっていいですか、とつても興味がある。見せ方が駄目。

サクラ先生: 全員、発言者さんも限られてた形やったから、ほかの子たちは何してたのって。そういうふうになっちゃうから、みんなが参加してるようなのをもうちょっと見せないといけないだろうなっていう。

Y: それ聞いて正直どう思いましたか。

サクラ先生: 正直、(当該授業において重要なのは)思考やから、思考。私が望んでんのは子どもらの思考の安定化っていうか、よく考えるっていうことを望んでるから、確かにみんなたくさんそれぞれの子たちが発表するならいいんだけど、発表しないからって考えられないわけじゃなくて、その子ら、その子なりに考えていることを大切にしたいなっていうのは(あります)。今の保護者の方でも、無理に発表させんといてほしいみたいな感じのことを言ってきた。 (2019/10/19)

Y: 目の前の子どもに応答すること。つまりこの子には今こうさせといた方がいいな、例えば手をいじってても今の状態をキープさせてた方がこの子にとって学びが多いって思う瞬間ってあると思うんですね。一方で授業公開するってなったら、その子に対しての学びとは別の動機が入ってくるんじゃないか、そういうことって感じることはありません？



サクラ先生：そう見られるよなって思ってますけど、そういう子です、そこもそういう子なんですという感じなので。だからってその子が考えてないわけでもないし、授業後半になったら多分つぶやきがすごい多かったと思うんですけど。

Y: 多かったですね。

サクラ先生：そういう子なので、手を挙げるっていうことを彼はしない、あんまり。あんまりとかほとんどしなくて、何かいい発言をするのでその時に私が聞き逃さずにそれってどういうことって聞いてあげることでその子が意見言って、そういうことなんやってなるので。 (2019/10/19)

以上のような、「子どもの学びの様子は、学校生活や授業を共にしている教師だからこそ見て取れる」という語りは、〈大学附属の新しい役割〉に対する、サクラ先生なりの批判的な解釈であると理解することができる。なぜなら、公開授業で求められるであろう「地域の小学校の模範となる教育実践」に対して、サクラ先生は「でもやってることは授業やから」と述べ、「そういう意味では息苦しいってのはないですね」と言い切るからである。

公開された授業に対して「厳しい」評価が向けられる恐れがありながら、サクラ先生が自身の教育観に基づいた教育実践を遂行できる背景には何があるのだろうか。インタビューではまず、サクラ先生の教育活動を見守り、意義づけてくれる存在としての保護者が浮かび上がって来た。

サクラ先生：嬉しい言い方だと、保護者の方が、何かあった時にノートの字が変わりましたとかっていうこともそうだし、連絡帳に一言感想とか書くんですけど、そういうのをしてくれるから子どもの様子がわかります。そこから子どもに話聞けますとか、何かちょっとしたことなんですけどそういうことを言ったださるんで、そういうこともやっぱりちゃんと見てくれてんだなって思う。

(2019/10/19)

したがって、「地域の小学校の模範となる教育実践を提案しなければならない」という期待は、サクラ先生にとって、自身の教育実践と密接に結びつくものではない。ただし、かといってサクラ先生は外部者の目を全く無視しているわけでもない。公開授業には、毎年のように遠方からサクラ先生の授業を参観しにくる教師がいる。彼らの存在に対してサクラ先生が語るのは、高木（2011: 36）や大泉（2011: 25）が述べるような、「共同性」、「学び合い」という比較的新しい指導法を意識した〈大学附属の新しい役割〉である。サクラ先生が自身の教育観に基づいた教育実践を遂行できる二つ目の理由は、「模範」と対置される「提案」というスタンスにある。

サクラ先生：教えてくださって感じじゃないですね。去年の（公開）授業だったら今年もすごくよかったですか言ったださったりとか、あと数名、たぶん国語好きの先生とか今年もきましたみたいな感じの。それこそS県とかから。

Y: S県から来てくれるんですか。

サクラ先生：そう。そのコメントね。多分この人毎年きてくれてはる人やなとか何かそういうのを聞くと、模範っていうより、こんな風に国語の授業ができますよって、一般化じゃなくて、私こんな風にやってるんですっていう。

(2019/10/19)

#### 4.〈大学附属の新しい役割〉に対する批判的解釈と教育実践との関係

しかしながら、サクラ先生が体现している、あるいは少なくとも目指している「共同性」や「学び合い」に根ざした〈大学附属の新しい役割〉は、原理的には、現代的状況の中で模範的役割を期待される〈大学附属の新しい役割〉を完全に乗り越えるものではない。なぜなら、サクラ先生は、学習指導要領と自身の実践の対応関係を明確に意識した上で、それを子どもではなく外部者に「見せる」ものとして構想している部分があるからである。無論これは大学附属教員でなくとも意識する点である。教育実践に対する説明責任がいつそう求められる今日では、教師に必須の技術といっても過言ではない。

ただし、これまでみてきたように、サクラ先生は教育実践の際に意識せざるを得ない〈大学附属の新しい役割〉に対し、否定的な解釈を加えていた。そして、それはあくまでも、一教師の教育実践に帰せられるものではないものと考えられていた。だが一方で、彼女はインタビューにおいて同時に、「求められているものには答えたいと思う」と語り、一定の理解を示そうとしていたのである。それが授業において具体化されていた一例として、2020年度から小学校で全面实施される新学習指導要領との対応が意識されていた点が挙げられる。

サクラ先生：そこ（新学習指導要領との対応）はね、やっぱり外せないっていうか。

Y: はい。そこっていうのは指導案で書いている。

サクラ先生：目標の言葉は指導要領のなかの言葉を使って書いてますっていうことです。

(2019/10/19)

加えて、サクラ先生は授業で保証すべき子どもに対する能力形成という課題に対し、次のように言及している。

サクラ先生：力をつけさせないといけないって言われてるし確かにそうだなっていうのもあるから、つけさせないといけないとは思うんです。例えばコスモスですかね。今回のあのやつだったら（コスモスを巡って登場人物三者の）<sup>8</sup>関係性とかっていうのをどう捉えていくのかっていう読み方。

(2019/10/19)

それでは、なぜサクラ先生は「地域の小学校の模範となる教育実践を提案しなければならない」という大学附属の役割に対し批判的な態度を表明したのだろうか。このような筆者の疑問に対し、サク

---

8 「資料2」の板書の元になった計画は、元々「お父さん」「お母さん」「ゆみ子」の三者を三角形でつなぐところまでしか構想されていない。三者の関係を捉えるという目的の下、あえてアンストラクチャーにすることによって、柔軟に子どもの発言や学びを捉えようとする意図がそこにはある。

ラ先生が筆者を納得させようと使用した用語法<sup>イディオム</sup>とは、下記でみるような「自由」という表現に収斂される。サクラ先生は、学習指導要領の「基準」としての性格を強調した。

Y: 今度学習指導要領新しくなるじゃないですか。それをある意味でこうやって授業するってなると、たぶん次の公開授業（年に一度行われる大規模なもの）は新しい学習指導要領をどう反映させた授業にしているのかなって関心で見に来る方がいると思うんですけど、そうなったときに学習指導要領に縛られることの苦しさというか、あまりないですか？

サクラ先生: っていうかあんまり縛られてない。

Y: あんまり縛られてない。どういうことですか？

サクラ先生: 自由です。

Y: (目標の文言は指導要領に入れると言ったのに) 自由っておっしゃったのはどういうことですか。

サクラ先生: あと（目標や能力形成の他）は自由です。

Y: あとは自由。そのやり方ってどうやって身につけていったんですか。

サクラ先生: いろんな先生の授業を見たりそれこそ先人たちの実践記録とか、今も研究会に入って勉強したりとか、別の研究会にも入ってたことがあるんでそこで色々教えてもらったりとか。そういうことがあるからこれ（学習指導要領）はあくまでも一つ、こういう方向に進んでいくんだよみたいなぐらいなもので。

一教師としての立場を強調することによって〈大学附属の新しい役割〉を批判的に乗り越えようとしていたサクラ先生は、インタビューの中で同時に、一教師の立場をも脱ぎ捨てようとする。それは、上記の新学習指導要領への態度と矛盾するような語りとして次のように登場する。

Y: 今僕ちょっと話してて気がついたんですけど、保護者からの期待がやっぱ一番附属教員としては、自分が附属教員だって感じるころだっておっしゃったじゃないですか。とするとさっきサクラ先生が自分で言っていたみたいに、詩とか文学が教育内容から削減されたら、当然保護者からも、「え？そんな授業まだやるんですか」っていうような反応が出てくると思うんですね。それに対してはどういうスタンスでいようと思われてるんですか。

サクラ先生: なくなったら？

Y: はい。

サクラ先生: どうしよう。考えてない。

Y: あるいは削減されてっていうことですよ。あんまり期待されるころじゃなくなったら。

サクラ先生: でもやると思う。

Y: それはどうしてですか。

サクラ先生: 大切だと思うから。だから例えば説明文の方が受理されてっていうことであれば、説明文ももちろんちゃんとやるっていうのを示した上で文学もやる。



Y: 面白いですね。それは、保護者の要求はある意味突っぱねても。大学附属教員として。

サクラ先生:そこは附属教員関係ないです。

Y: 関係ないですか。え、じゃあ附属教員じゃなくなるかもしれない。

サクラ先生: 公立でもそれ（保護者からの要求）は変わらない。（中略）

Y: (附属教師や教師を) 背負っていない理由ってなんだと思いますか。

サクラ先生: そんな人じゃない。

(2019/10/19)

上述のやり取りの中で語られた、国語科教育実践の担い手としての意識をめぐる物語は、サクラ先生の個人的な解釈に回収され得るものだろうか。このことについて、示唆に富むのは奥平(2016)の「人間を通して教育する」という議論である。奥平は、須藤（1951）を引用しながら、「それ（人間を通して教育する）は教育について考えるときの伝統的着眼点であって、少しも目新しいことではない」（奥平 2016: 334）と述べる。ところが、『「人間（教師の人間性）を通して人間（子どもの人間性）を教育する』という言説は、教育作用と被作用の関係があまりにも包括的であって、教育作用の分析的明晰性を求める近代教育学では採用されなかった」（同上）と指摘する。

このことからサクラ先生の語りを逆照射してみると、次の点が浮かび上がってくる。第一に、サクラ先生は〈大学附属の新しい役割〉を乗り越える視点として、一教師としての役割、すなわち授業を担う上で重要なのは、目の前の子供に応答することであるということを強調した点である。この時に有効だったのは、教師として、「地域の小学校の模範となる教育実践を提案しなければならない」という言説を内面化するよりも、「保護者からの期待」を受け止める方が、子どもにとっても有益であるという論理である。

しかし、「保護者の期待」を軸に教育実践を正当化した時、学習指導要領に忠実な授業をいかに構想するかが問われる可能性が生じる。この可能性を受け入れた時、サクラ先生は「地域の小学校の模範となる教育実践を提案しなければならない」という〈大学附属の新しい役割〉に再び回収されてしまう。そこで第二に登場したのが、子どもに直面する「人」としての役割の強調であった。これは、目の前の子供にとって「大切だと思うから」という理由でサクラ先生によって正当化される。

結果、サクラ先生においては、教育実践は〈大学附属の新しい役割〉の批判的解釈による一教師の役割の明確化に先行するものとなる。人間を通しての教育とは、「訓育と教授あるいは生活指導と教科指導の同時進行の教育課程」（奥平 2016: 334）を意味するがゆえに、現在のような教科細分化に基づいた「一教師の役割」を逸脱するものにならざるを得ない。つまり、生活を含めた全人的な教育を意味する。サクラ先生がこのことを自覚しているかは今後の調査を待たなくてはならないが、大学附属教師からこのような語りが出てきた意義は、次項でみる意味において重要である。

## 5. 総合考察ーエージェンシー拡張の契機ー

本稿では、調査協力者であるサクラ先生へのインタビューをもとに、「大学附属小学校の役割」を基盤として構成される〈大学附属の新しい役割〉と教師の実践の関係を、当事者がいかに語るのかを

読み解いてきた。そこでは大学附属教員の役割、一教師の役割を逸脱する、教育実践に対するサクラ先生の意味が垣間見えたが、最後にこのことの意味を、教師のエージェンシーの問題と関係づけて検討しておきたい。

サクラ先生の語りには、少なくとも二つの可能性がある。一つには、教師の自前の教育思想を認め、支援する必要を喚起することである。これは教育史の中では手垢にまみれた議論であるが、今なお重要な論点であろう。例えばサクラ先生へのインタビューでも登場した学習指導要領は、改めて述べるまでもなく教育課程の「基準」であって、「教育課程編成の一般方針」には「各学校においては、法令及びこの章以下に示すところに従い、児童の人間として調和のとれた育成を目指し、地域や学校の実態及び児童の心身の発達段階や特性を十分考慮して、適切な教育課程を編成するものとする」<sup>9</sup>とある。しかし教育課程はその都度の支配的な思想によって独占され、一般の教師は流布されたものを俗流理解し、あるいは利用している。〈大学附属の新しい役割〉の存在はそのことを如実に表しているが、一方でサクラ先生のインタビューでは、教師が日々の生活行動（サクラ先生の場合は民間の研究会への参加）の中で、日々の活動に必要な思想を作り出し、保持し、用いているという事実がみられた。〈大学附属の新しい役割〉が教育にとって有意義な形で機能する可能性があるとするれば、この態度に学ぶという姿勢だろう。

二つ目の可能性としては、教師のエージェンシーの拡張は、教育実践という行為の担い手としての意識を説明する際の、立場の拡張によってもたらされるという仮説を提供することである。自身の国語科授業を道具立てとして、様々な葛藤状況を発見したサクラ先生は、自身の実践を説明する際に、大学附属教員という社会的役割から一教師という役割へ自身の立場を拡張し、更には「人として」という立場を、自身の教育実践の動機の説明に使用した。

ただし、ここには教授行為の際の、「教える」立場の不安定さがつきまとう。だからこそ、そうした「教師の語り」を可視化し、エンパワメントしていく作業が必要」（伊勢本 2017: 362）なのだと言えよう。〈大学附属の新しい役割〉は一見して、中央からトップダウンで降ろされた教育政策を現場がただ単に実行する、といった、単線的な教師像を再生産する概念装置のように思われる。ただし、それらに対する自身の教育実践の位置を教師が知ろうとすると、多くの場合そこには葛藤が生じるだろう。その葛藤に対する教師個人の物語に耳を傾けることで、彼／彼女らのエージェンシーの拡張方法が発見され、定式化することも可能になるはずである。サクラ先生へのインタビューから導かれた上記二つの可能性を検証してゆくことが、本稿に残された課題である。

## 謝辞

「教育理解に繋がるなら、なんでも協力しますよ」という、サクラ先生の、教育および教育実践への類稀なる熱意と、献身的なご協力に心より感謝申し上げます。

9 文部科学省ホームページ「教育課程編成の一般方針」([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo3/039/siryo/attach/1402682.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/039/siryo/attach/1402682.htm)) 最終閲覧日：2019/10/29。

## 資料 1

下記はサクラ先生によって作成された学習指導案である。なお、指導案中の網掛け部分は、本稿の筆者による変更を表す。

### 国語科学習指導案

指導者 サクラ（仮名）

- 1 日 時 令和元年10月17日（木）14：15～15：00
- 2 学年・組 第4学年 **組**（在籍35名）
- 3 単 元 名 作品から受け取ったメッセージを伝え合おう（今西祐行「一つの花」学図4年上）
- 4 単元の目標
  - 知識・技能
    - ・作品全体の内容や登場人物の行動や気持ちを捉えながら音読することができる。
  - 思考・判断・表現力
    - ・登場人物の気持ちや性格、情景について、場面の移り変わりと結びつけて具体的に想像することができる。
    - ・作品を読んで理解したことについて、自分の体験や既習の内容と結びつけて感想や考えをもつことができる。
  - 学びに向かう力・人間性
    - ・戦争をテーマにした作品に関心をもち、物語の描かれ方を基に、作品から受け取ったメッセージを伝え合おうとする。
- 5 指導計画（全10時間 本時5／10時間）
  - 第1次 作品から受け取ったメッセージを伝え合うという学習の見通しをもつ。（2時間）
  - 第2次 作品の描かれ方（登場人物の気持ちに関わる心情描写、戦中と戦後の対比や場面のつながり方、結末部、題名など）を捉え、「一つの花」から受け取ったメッセージを伝え合う。（6時間）
  - 第3次 心に残った作品から受け取ったメッセージを伝え合う。（2時間）
- 6 本時の学習
  - （1）本時について
 

本単元は、小学校学習指導要領解説国語編、第3学年及び第4学年の内容「2〔思考力、判断力、表現力等〕の「C 読むこと（エ）」と「C 読むこと（オ）」を中心的な指導事項とし、作品から受け取ったメッセージを伝え合う言語活動を設定する。

「一つの花」は、戦争を背景として、ゆみ子とその両親の生活を描いた作品である。戦争の中で生きた人々の悲しみやそれに負けずに平和を願い、希望をもとうとした人間の強さや家族の愛情が描かれている。本作品は、登場人物の視点ではなく、第三者からの視点で語られている。そのために、間接的な表現から登場人物の気持ちを推し量る読み方ができる。また、登場人物や情景の描写は、多くの類比や対比によってつながっており、それらの相互の関係性を読み解くこともできる。

これまで学習者は、「白いぼうし」を中心学習材とした単元「ファンタジー作品のおもしろさを語り合おう」において、登場人物の性格、不思議な出来事、表現のおもしろさ、題名に着目し、ファンタジー作品のおもしろさについて考える学習に取り組んでおり、観点をもって読むことを経験してきている。今回も観点をもって比べて読んだり重ねて読んだりすることで、第二次で学んだことを第三次で活かせるようにしたい。

戦争をテーマにした作品を学習するのは初めてであるが、あくまでも作品に描かれている表現を基に具体的に想像を膨らませたり、複数の戦争をテーマにした作品を読んだりすることを通して、戦争を捉えさせたい。そうするなかで、そこに生きる登場人物の様子や気持ちを思い描けるようにし、作品から受け取ったメッセージについて自分の考

えをもてるようにしたい。

本時では、「なぜ，お父さんはゆみ子に一輪のコスモスを渡したのだろう。」について考える。ここでは，お父さんが食べ物ではなく，美しいものを与えていることに着目させるため，おにぎりとコスモスを対比させる。そこから，お父さんはゆみ子に何を伝えようとしているのかを考えさせたい。学習者によっては，平和への願いを込めたり，父の形見として受け取ったり，ゆみ子の成長を願ったりするものとして考えるだろう。そう考えた理由を本文や生活経験を根拠に考えを述べることができるようにしたい。

これまで，ゆみ子が「一つだけちょうだい。」と言ってきたものは食べ物であり，美しいものを美しいと思える心をもつゆみ子を見て笑顔になる父の気持ちに学習者自身が気づいていけば，発展的な授業でめざす人間としての真実の姿を捉えることにつながると思われる。

(2) 目標

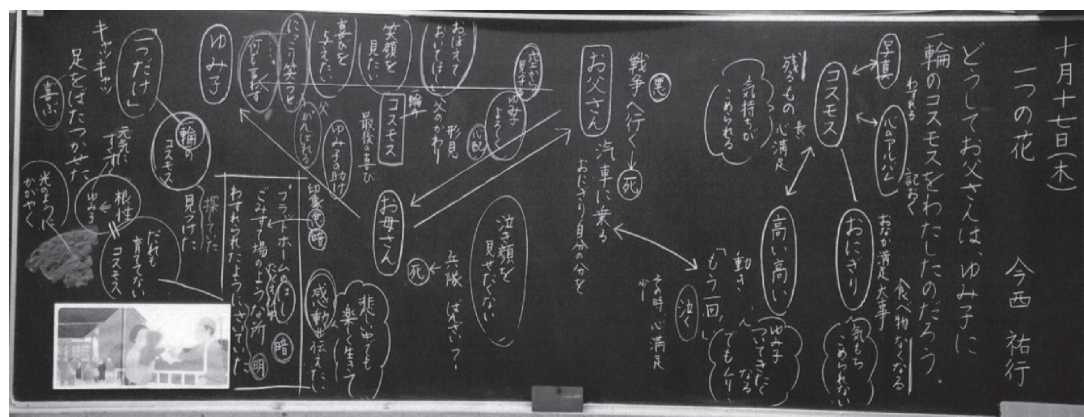
お父さんが渡した一輪のコスモスを通して，そこに込められたお父さんの思いや願いについて考えることができる。

(3) 展開

学習活動	○支援 ?子どもの問い ◆評価規準
1. 本時の課題をつかむ。	第二時で話し合いたいこととして挙げた「なぜ，お父さんはゆみ子に一輪のコスモスを渡したのだろう。」を本時で考えることを確認し，課題を共有する。
2. 課題について考える。	? どうしてお父さんは，ごみすて場のような所にさいていたコスモスを渡したのだろう。 本時に関わる本文を読み，根拠となるところに線を引いたり印をつけたりすることで，自分の考えの理由をもちやすくする。
3. 考えを交流し，一輪の花に託したお父さんの思いや願いを考える。	もし，コスモスではなく，ゆみこが欲しがっていたおにぎりを渡すと何が変わるかを考えることによって，渡したものの違いからコスモスを渡すことへの意味に着目できるようにする。 お父さんの気持ちを中心に考えていくが，お母さんが二人の様子をどのような気持ちで見ているのかと問うことで，両親のゆみ子への愛情に気づけるようにする。
4. 本時のふり返しをする。	? もしも，コスモスではなくおにぎりを渡していたら，どうなるのだろう。 ◆ 一輪のコスモスに込められたお父さんの思いや願いについて考えている。(思・判・表) 話し合いを通して考えたことをふまえ，本時の課題について自分の考えを書くことで，本時をふり返られるようにする。 ◆ 話し合いを通して理解したことを基に，自分の考えや感想をノートに書いている。(思・判・表)

## 資料 2

下記はサクラ先生によって実施された、「一つの花」の授業の板書である。なお、板書は学習指導案上の5～6/10時のものである



## 参考・引用文献

- イ・ヨンスク (2012) 『『国語』という思想—近代言語認識』、岩波書店。
- 伊勢本大 (2017) 〈教師批判言説呪縛—「こども理解」をめぐる小学教師の解釈実践—〉、『教育社会学研究』第10集、pp.347-366。
- 大泉義一 (2011) 「シンポジウム 附属学校の新しい役割：企画にあたって」、『教育デザイン研究』第2巻、p.25。
- 奥平康熙 (2016) 『山びこ学校のゆくえ—戦後日本の教育思想を見直す—』 学術出版会。
- Goodson, I. F. (2001) 藤井泰・山田浩之編訳 『教師のライフヒストリー』 晃洋書房。
- 白松賢 (2004) 「マジックマッシュルームとは何か」、『教育社会学研究』第74集、pp.189-207。
- 陣内靖彦 (2005) 「教師の地位と役割」、岩亮一・陣内靖彦編 『学校と社会』 文学社、pp.125-139。
- 須藤克三 (1951) 『『山びこ学校』から何を学ぶか』 青銅社。
- 高木展郎 (2011) 「シンポジウム 附属学校の新しい役割」、『教育デザイン研究』第2巻、pp.35-36。
- 山田浩之 (2010) 「信頼と不信」、『教育社会学研究』第86集、pp.59-74。